

2015 夏休み すいせん図書

～本の森へ～



西東京市図書館

1・2年生

「あげます。」 浜田桂子 作／ポプラ社
うちにへんなのがやってきた。へんなののせいで、ママもパパもおばあちゃんもおじいちゃんも、ぼくのことはしらんがお、せなかにんげんになった。

ぼくはかんがえた。へんなのをだれかにあげてしまえばいいんだ。ともだちがへんなのをほしくなるように、ぼくはいろいろなことをはじめた。

「あれあれ？そっくり！」 今森光彦 著／ブロンズ新社
あれあれ？はっぱかな？かれはかな？こえだかな？そっとちかづくとみえてくる。おしたちの、めやあしや、はねのもよう。しぜんのなかで、かくれるのがとてもとくいな、おしたち。あんまりかくれんぼがしょうずなので、おどろいてしまう。
そんなおしたちのすがたを、きれいなしゃしんでしょうかいしています。

「ポケットのないカンガルー」エミイ・ペイン さく H.A.レイ え にしうちミナミ やく／楷成社
おかあさんカンガルーのケイティは、おなかにポケットがないので、小さなぼうやのフレディをどこにもつれていけません。ところが、あるときケイティは、おもいつきました。「ほかのどうぶつのおかあさんは、どうやって子どもをはこんでいるのかしら。ポケットなんかないのに。」さっそくききにいてみることにしました。

「ちいさなへいたい」 パウル・ヴェルレプト 作 野坂悦子 訳／朔北社
あるひ、せんそうは、はじめた。どうしてそうなったのが、わからないうちに。ぼくたちは、たたかい、なかまたちはつぎつぎしんだ。そうしてあるひ、せんそうはおわった。みんなは「せんそうにかった!」といって、おあよろこびした。けれどおあぜいのひとがいえをなくし、かなしんでいるたくさんひとがいた。

「あひるの手紙」 朽木祥 作 ささめやゆき 絵／佼成出版社
ほんまち小学校に、ふしぎな手紙がとどきました。ふうとうのおもてには「いちねんせいのみんなへ」、さしだしには「たなかけんいち」。びんせんには「あひる」とだけ書いてありました。「たなかけんいち」さんは、みんなと文通がしたくてこの手紙を書いたのです。そこで一年生のみんなは返事を書くことにしました。

「ななとさきちゃんふたりはペア」 山本悦子 作 田中六大 絵／岩崎書店
ななは、なりたての1年生。ななの学校では、1年生と6年生がペアをくんで、1年間いっしょにあそんだり、べんきょうしたりします。「ペアのおねえさんは、せがたかくて、きれいで、やさしいおねえさんだ」といいな」とドキドキです。ところが、ななとペアになったのは、大きなめがねをかけた、やせた小さなおねえさんでした。

「わにのはいた」 マーガリット・ドリアン ぶんとうえ 光吉夏弥 やく／大日本図書
どうぶつえんにいるわにのアリは、はいたでよるもねおれませぬ。ようすをみにきたえんちょうせんせいがいいました。「きみは、やっぱり、はいしゃさんへいかなくちやなるまいね。」バスにのってはいしゃさんにいくことになったアリですが、じつははいしゃさんがこわくて、とてもいけそうにありません。

「のりができるまで」 伏屋満 監修 北川暢男 写真撮影／ひさかたチャイルド
ぱりぱりしておいしいのり。どうやってつくられているか、知っていますか。のりはうみのなかでそだつくさなんだ。うみにあみをはって、30にちぐらいうると、ふさふさしたのりがついてくる。のりをとりだしてみると、どろどろしている。どうやってぱりぱりになるんだろう。いろいろなりようりにつかわれている、のりのひみつがわかります。



3・4年生

「きみの家にも牛がいる」 小森香折 作 中川洋典 絵／解放出版社
牧場で牛を見たことはありますか？では、みなさんの家に牛はいますか？牛は、私たちの生活で欠かすことのできない存在です。私たち人間は牛から牛乳をいただき、いろんな食べ物をつくれます。また、肉牛の肉もいただきます。それだけではありません。牛は丸ごと一頭、どこも捨てるところがない動物です。さあ、自分のまわりを見てみましょう。「牛」がたくさんいるはずですよ。

「やくそくのどんぐり」 大門高子 文 松永禎郎 絵／新日本出版社
韓国の南にハプチョンという町があります。高台にたつ「みんなの家」に、ヒバクシャたちがくらししていて、庭に、ヒロシマのどんぐりの木が育っています。…それは、日本が戦争をしていたころのこと。キム・スングは、ヒロシマで生まれ、金田正夫という名前で育ちました。両親は生きるため、ヒロシマに働きにきた韓国人でした。ある日、学校で正夫にどんぐりをくれたのが、武夫くんでした。

「図書館に児童室ができた日 —アン・キャロル・ムーアのものがたり—」 ジャン・ピンボロー 文 デビー・アトウェル 絵 張替恵子 訳／徳間書店
1870年ごろのアメリカであった、ほんとうのおはなしです。アンはものがたりをよんでもらうのがだいすきな女の子。そのころ、子どもたちは図書館のなかにはいれませんでした。大人になったアンは、図書館に子どもだけのための「児童室」をつくらうとおもいました。子どもたちがじゆうに本を手にとり、いつでも楽しい本がよめるように。

「犬をかうまえに」 赤羽じゅんこ 作 つがねちかこ 絵／文研出版
空斗は犬がだいすき。いつもペットショップに見に行っている。たんじょう日に犬がほしいのだが、うちではかうことができない。弟が小児ぜんそくのため、犬やねこの毛で発作が起きるからだ。ある日、尾崎さんというお年よりの飼犬チャッピーの散歩ボランティアをすることになった。「犬をかえなくても、いっしょに遊べる!」とはりきる空斗だが、チャッピーはなかなか言うことをきいてくれない。

「かあちゃん取扱説明書」 いうみく 作 佐藤真紀子 絵／童心社
家で一番いばっていて、あつかなくてケチなかあちゃん。とうちゃんから、そんなかあちゃんをとりあつかうには、「とにかくほめることだ」と教わった哲哉。あつかい方が大事だと気がついた哲哉は、「かあちゃんとりあつかい説明書」をつくることにした。『各部の名称』『各種機能』『お手入れの方法』『ご使用方法』これがかあちゃんのトリセツだ。いったいどんなトリセツができるのだろうか？

「わたしのひよこ」 磯みゆき 文 ささめやゆき 絵／ポプラ社
ひっこみじあんで、めだたないひな子。ある日、人気者のナオミちゃんのなかよしグループにまざるようになった。あこがれのナオミちゃんといっしょにいと、ひな子は今までとちがう自分になったような気がした。でも、時々、グループでいっしょにいるのがきゅうくつに思えてきて…。そんなひな子をなぐさめてくれるのは、縁日の夜店で買ってもらったひよこのぴーころだった。

「リンゴの丘のベツティー」 ドロシー・キャンフィールド・フィッシャー 作 多賀京子 訳 佐竹美保 絵／徳間書店
赤ちゃんの時に両親を亡くし、町に住む大おばさんのもとでだいに育てられたベツティー。ところが9歳になったある日、大おばさんが亡くなり、親戚のパットニー農場に行くことになりました。泣き虫でひっこみじあんなベツティーでしたが、農場ではじめてのことばかりの暮らしをするうちに、少しずつ変わっていきます。

「お面」 井上重義 文 日本玩具博物館 監修／文溪堂
お面とはどんなものをそうぞうしますか？お祭りで見るようなお面でしょうか？お面は仮面ともいい、自分の顔に別の顔をつけて、もとの自分とは違う存在になるようにするための道具です。この本では、日本各地域の行事で使われるお面や特色のあるお面、また、世界各国のお面を紹介しています。



5・6年生

「希望の牧場」

森絵都 作 吉田尚令 絵 / 岩崎書店

2011年3月11日、東日本大震災。原発施設をつなみがおそい、事故がおこった。放射能が広がって「立ち入り禁止区域」になった土地。だれもいなくなった町の牧場にオレはのこった。なぜなら、オレは牛飼いだから。放射能をあびて、売れない牛たちにまいにちエサや水をやる。近くの牧場主からたのまれた牛や、まいごになってた牛も、ひきとった。なぜなら、オレは牛飼いだから。やがてうちの牧場は、「希望の牧場」とよばれるようになった。



「パンプキン！一模擬原爆の夏一」

令丈ヒロ子 作 宮尾和孝 絵 / 講談社

夏休み、いとこのたくみが大阪にやってきた。無口で変わり者のたくみは、着くなり、町の石碑を調べ始めた。石碑には、「模擬原子爆弾投下跡地」と書かれている。アメリカは戦争中、本物の原子爆弾を落とす前に、原爆と同じ形の模擬原爆、通称「パンプキン爆弾」を作って、目的の場所に落とす練習をしたという。日本のあちこちに落とされたパンプキン爆弾。いったいどんな爆弾だったんだろう？



「あしたも、さんかく一毎日が落語日和一」

安田夏菜 著 宮尾和孝 絵 / 講談社

1年生のとき以来行方不明だったじいちゃんが、5年生の3学期にほくの前にあらわれた。じいちゃんは50歳の時に仕事をやめ断家になった。だけど、酒癖が悪く師匠に破門された。それでも、落語家への気持ちがあきらめきれず、ほくの貯金を使い込んで独演会を開いてしまったのだ。じいちゃんは、このお金を返そうと、賞金100万円の『アマチュア落語コンクール』で優勝を目指すというのだ。さて、その結果は？



「ブルースマンと小学生」

こうだゆうこ 作 スカイエマ 絵 / 学研教育出版

六年の鉄平は、仲間たちと野球をしていた空き地がなくなったせいで、野球ができなくなった。友達が入った地域の少年野球チームは、母親にお金がかかると断られる。エースピッチャーで強打者だったのに。なにもかももうまくいかず、ヤケになった鉄平は、学校を休むようになった。ブラブラしていた鉄平が出会ったのは、公園でギターをひき、歌を歌う赤い髪の兄ちゃん。彼は、鉄平にブルースを歌って聞かせた。



「ヘリオット先生と動物たちの8つの物語」

ジェイムズ・ヘリオット 作 村上由見子 訳 杉田比呂美 絵 / 集英社

往診先の農家で目にした牧羊犬の子犬ジップとスウィープ。二匹は親友で、とても仲よくじゃれあっていた。飼い主によると、ジップにはひとつあかしなところがある。それはまったく吠えないことで、生まれてから一度も吠えた声をきいたことがないという。ところが、それから何ヶ月かたったある日、ジップがたった一度「ワン！」と吠えた。(『たった一度のワン！』より) 獣医のヘリオット先生と動物たちのお話が、8つはっています。



「戦場のオレンジ」

エリザベス・レアード 作 石谷尚子 訳 / 評論社

内戦で破壊されたバイルートの町で暮らす、十歳のアイーシャ。父親は仕事をさがしに外国へ、そして母さんは爆撃で行方不明。家を無くしたアイーシャは、おさない弟たちとおばあちゃんと、元はアパートだった建物に、他の避難民と一緒に暮らしている。ところが、たよりにしていたおばあちゃんまでたおれてしまった。おばあちゃんを助けるには、グリーンラインの向こう側まで薬をもらいに行かなければならない。



「二十四節気のえほん」

西田めい 文 羽尻利門 絵 / PHP 研究所

二十四節気ということばをきいたことがありますか？これは1年間の太陽の位置を24等分してそれぞれの区分点となる日に「立春」「啓蟄」「夏至」といった天候や自然の変化を表す名前をつけたものです。今でも多くの季節行事がこれを基準に行われています。二十四節気には、自然とともにくらしただ昔の人びとのちえがいっぱいつまっています。



「トイレをつくる未来をつくる」

会田法行 写真・文 / ポプラ社

東ティモールでは、これまで、おおぜいのひとが川や森の中、自宅の裏などで、うんちやおしっこをしていました。そのため、子どもたちがコレラなどの病気にかかり、おおくのひとが命を落としてきました。屋外でうんちをする習慣が、子どもたちの健康に影響をあたえることを学んだ大人たちは、清潔なトイレづくりに立ちあがりました。トイレの扉は、子どもたちの未来につながっています。

